

ベトナムにおける黒タイの文字文化

著者	樫永 真佐夫
雑誌名	明日の東洋学 : 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報
巻	22
ページ	2-6
発行年	2010-01-29
URL	http://hdl.handle.net/10502/4843

ベトナムにおける黒タイの文字文化

櫻永真佐夫

西南中国を含む東南アジア大陸部北部は、多民族、多言語、多文字で知られる。この地域における、文書の生産、使用、保管は、地域を取り巻く環境や、そこに暮らす人々の日常とどのように関わってきたのだろうか。文字の系統論にとどまらず、文字文化が社会にどのように埋め込まれているのか、人類学者や歴史学者による関心が高まっている^(注1)。

この地域の言語分布と文字分布は、かならずしもぴったり重ならない。さらに、この地域が多文字なのは、それぞれの民族が、自分たちが話していることばを表記する独自の文字を発達させてきたのではないからだ。たとえばタイのミエン（中国におけるヤオ、ベトナムにおけるザオ）は、漢字漢文を用いて道教儀礼を執行してきた一方、ミエン語は表記しなかった。同様に、この地域の各民族が、どの文字を用いるか、あるいは用いないかは、儀礼慣行、外交、契約、娯楽をはじめとする、文化的、社会的コンテキストによってきたのである。

本稿でも、黒タイと称する人々の文字文化を、彼らの生活との関わりから理解する。以下では、まず、東南アジア大陸部北部における諸文字継承の状況を俯瞰しよう。次に、黒タイという民族の範疇を文字文化との関わりから示し、彼らの固有文字で記された文書の生産、使用、保管について述べたい。

1. 東南アジア大陸部北部のローカル文字継承

20世紀の国民国家化を経て、東南アジア大陸部北部は、中国、タイ、ラオス、ミャンマー、ベトナムといった、複数の国家に領土分割されている。その結果、西南中国では漢字、北・東北タイではタイ文字（シャム文字）、北部・中部ラオスではラオ文字、ミャンマーのシャン州ではビルマ



黒タイが居住する盆地風景
ベトナム、ライチャウ省タンウエン県。
2002年6月、撮影者：櫻永真佐夫

文字、西北・東北ベトナムではベトナム語（キン語）ローマ字表記のクオック・ゲーが普及している。

これら各国の国家語を表記する文字（ここでは「国家文字」とよぶ）は、近代教育を通じて普及したものである。一方で、国家文字とは異なる文字伝統が、19世紀以前の地方村落にも存在していた。英仏を中心とする19世紀の探検家たちが残した資料を見るだけでも、貝葉や紙を書写材料とし、さまざまな伝統文字によって記された宗教文書、行政文書、年代記、書簡など、さまざまな内容をもつ文書類が数多く確認できる。

こうした国家文字ではない伝統文字を、本稿ではローカル文字と呼ぶ。各国の政治的、経済的、地理的周辺部が接しあうこの地域に、ローカル文字は数多く重なり合って存在してきた。20世紀以降は国家文字の優位が確立していくなかで、これらローカル文字継承者の数は減少傾向にある。しかし、このまま先細って、これらは近い将来消滅してしまうのだろうか。いや、どうやら意外にしぶとそうである。いくつかのローカル文字が、地域や民族アイデンティティと結びついて、積極的に継承されようとしているからだ。

たとえば、タム文字は、13、14世紀に伝播したパーリ語仏典を記すために用いられてきたモン系統の文字である。この文字は、東北タイ、北タイ、西北ラオス、シャン州、西南中国の一部までの連続する広い地域に、パーリ語仏典の写本とともに分布している。写本は、貝葉と呼ばれるタラバヤシの葉を書写媒体に、鉄筆で刻んで記されている。



デーヤイ村の寺院には100巻程度の貝葉が残されているが、2001年当時この文字を読むことが出来るのは70代の僧侶1人だけ（9名の僧侶が在住）。1999年に96歳で他界した僧侶はタム文字だけでなく、タイノイ文字、コム文字にも堪能であった。写真は古い貝葉を写しているところ。若い僧侶たちはこの文字に関心を持たないので、読み書きを教授することはまったくない。
タイ、コーンケン県ムアン郡デーヤイ地区デーヤイ村
2001年9月、撮影者：津村文彦



葬式での『クアム・トー・ムオン』の読誦
ベトナム、ディエンビエン省トゥアンザオ県
1997年11月、撮影者:櫻永真佐夫



日相をみるための占ト書『バップ・ム』。
ベトナム、イエンバイ省ヴァンチャン県ギアロ
2004年2月、撮影者:櫻永真佐夫

しかし、東北タイでも国家文字の普及とともに、タム文字を読み書きできる人は減ってきた。そうした中、近年、貝葉写本に代わって、貝葉の印刷本が出版されるようになり、ローカルな知識人や職業研究者がタム文字への関心を高めている。

黒タイ文字の場合も、ベトナムの市場経済化政策が軌道に乗り始めた1990年以降、ローカルな知識人と職業研究者が中心となって、民族の伝統として積極的に継承されようとしている。それを受けて、ソンラー省、ディエンビエン省の一部では、2000年前後から、小学校の補講授業に黒タイ文字教育を試験的に組み込んだ。

黒タイ文字は、どのように継承されてきたのだろうか。その問題に迫る前に、黒タイという集団性について、文書との関わりから述べたい。

2. 黒タイの集団性と年代記『クアム・トー・ムオン』

今日のベトナム社会主義共和国では、言語的特徴、生活・文化的特徴、民族的自意識という3つの指標に基づいて、54の民族が公定されている。諸民族の平等を標榜する共産党による、民族政策実施のためである。

総人口約7600万人の86%を占めるのがキン族である。彼らが、紅河デルタを中心に、千年以上にわたって、歴代ベトナム諸王朝を興亡させてきた。残り53の少数民族中2番目に人口が多い民族が、133万人を擁するターイ (Thái) である。黒タイは、白タイとともに、このターイの地方集団とされている。西北地方で灌漑水稲耕作を主生業とする

盆地民であり、国境を接するラオス側、中国側にも数万人単位で居住している。

ラオスでは、白タイ、黒タイは別の民族として分類されている。一方、ベトナムでは、この二つはターイという一つの民族の地方集団と見なされている。それは、ともにタイ語系の近似する言語を話すこと、上座仏教を受容していないにもかかわらず、上座仏教とともに東南アジア大陸部東部に広まった古クメール系の文字を継承していること、姓、財産が父系的に継承されることなどによる。

自分が白タイか黒タイかは、彼ら自身もふつうははっきり意識している。それは、居住地域が盆地ごとにかなりははっきり分かれているからである。さらに、彼らは次のような点に、両者の文化的相違を見いだしている。既婚女性の髪型、女性の上着の襟元の形、家屋内の配置、祖先を祭る忌日、表記文字の字体などの違いである。

伝承に注目しても、両者には、興味深い差異がある。ターイ社会は、20世紀に至るまで、首領を頂点とし、貴族、平民、半隷属民、奴隷という諸階層からなっていたが、首領や貴族を世襲したのは、黒タイの場合、ロ・カム系統の姓をもつ一族であった。彼らは、ギアロという大盆地に生まれ、各地を平らげながら最終的にディエンビエンにたどり着いた英雄祖先ラン・チュオンの子孫とされる。一方で、白タイの旧首領一族デオ氏などは、自分たちがラン・チュオンの子孫だとは考えていない。さらには、黒タイの居住地域がラン・チュオン征戦経路上にあったとされる諸盆地に、ほぼ一致しているのである。

ラン・チュオン征戦伝承は、年代記『クアム・トー・ムオン』に詳しいが、この年代記は黒タイの間でのみ継承されてきた。『クアム・トー・ムオン』は、首領の始祖の天上からの降臨、ラン・チュオンによる領土拡大、各首領の事績と系譜を記している。各地の黒タイ村落では、葬式の際にこれを読誦する習慣が、共産主義者による風俗改変が北ベトナム各地で進む1960年頃まで、持続されてきた。こうした習



西北区教育局出版から1966年に出版されたタイ語講読の教科書のコピー。タイ文字は印刷字体風だが、実は手書き。白黒ガリ版刷り。ハノイにて6000冊印刷されていることが、左頁（表表紙の裏面）に記されている。
ベトナム、ハノイ国家図書館所蔵
2006年3月、撮影者：櫻永真佐夫

慣は、黒タイの領土と歴史に関する社会的な記憶を、繰り返し人々に刻み込む役割を果たした。その意味で、この年代記は、黒タイという集団のメンバーシップと分布域を規定する政治的作品でもあった。

さらに、黒タイの人は亡くなったあと、ラン・チュオンの故地ギアロから天上に靈魂が登るという信仰を広く共有している。つまり、現世の人が住む地上と、精霊が住む天上世界を結びつけ、魂を往還させる回路も、ラン・チュオンの伝承と密接に関わっているのである。

3. 村落における文書継承

タイが継承してきた文字群は、ベトナムではタイ文字と総称されている。なかでも、黒タイが用いてきた統一性の高い字体は、黒タイ文字と呼ばれている。では、黒タイ文字による文書に、どのようなものがあり、また、それを人々がどのように、継承してきたのだろうか。

たとえば、筆者が1997年から調査してきたディエンビエン省トゥアンザオ県のA村を例に挙げよう。A村では、水田、焼き畑、菜園の経営と、家畜飼養によって、食料の多くを自給している。人口約360人、戸数約50で、人口規模、経済レベルともに、県では平均的な黒タイ村落であり、住民は皆、かつての平民出自である。

現在までA村に伝わっている黒タイ文字の文書のうち、ジンチョウゲ科の植物を材料とする漉き紙に、毛筆と墨で手写された古文書が4冊ある。うち3冊が歌謡で、残り1冊が『クアム・ファイン・ムオン』という年代記の一種である。

1997年に72歳の男性語ったところでは、かつてはもっと古文書があった。村の由緒書きもあった。しかし、インドシナ戦争（1946-1954）、ベトナム戦争（1960-1975）などの戦乱に加え、封建遺習撤廃や迷信異端排斥を目指す、党指導による風俗改変もあった。のみならず火災もあり、1980年頃、今の数に減った。

一般的に黒タイ村落でもっともよく目にするのは、歌謡

である。次いで暦書を含む占卜書である。しかし、A村の場合、暦書『パップ・ム』は、1970年代に学習ノートにボールペンで記されたものが一冊あるだけだ。しかも、他村で見られる伝統的な形態の文書よりも、明らかに薄い。抜粋だからだ。迷信異端の書を保持していると批判されるのを恐れた保持者が、原本を廃棄したせいである。

現在でも、婚姻、家の新築祝い、出立、田植えや収穫、その他各種儀礼を行う際には、『パップ・ム』を保持している祈祷師を訪ねて、日取りを選んでもらう。評判のいい祈祷師を、他村まで訪ねることもある。『パップ・ム』は、文字のみならず、記号と図像表現に満ちている。『パップ・ム』を読むとは、文字、記号、図表を総合的に解釈することである。解釈の技量もまた、祈祷師としての評判には含まれているからだ。

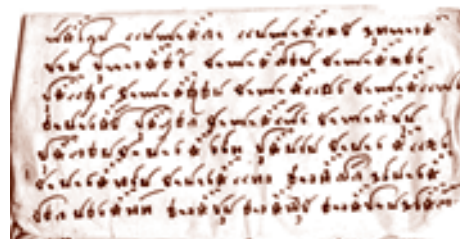
4. 村人の識字

どれくらいの人が、黒タイ文字を読めるのだろうか。1997年の調査では、A村で、女性2人を含む12人の50歳以上の男女が読み書きできた。一方、6歳以上の就学年齢の子どもと青年、当時40歳代前半までの女性、60歳代前半までの男性のほとんどが、クオックグーも読み書きできる。つまり、村で60%を越えるクオックグー識字率に比べて、黒タイ文字の識字率は、3%と低い。

黒タイ文字の低い識字率について、村人はしばしば「教える学校がないからだ」と述べる。たしかに、黒タイ文字を読み書きできる人たちは、黒タイ文字教育が実施されていた時代に就学していた人たちである。しかし、実際にそのようなのだろうか。一世紀近く歴史をさかのぼって話そう。

フランス植民地支配下にあった20世紀前半、公教育では、仏文とクオックグーが教えられていた。しかし、1954年にインドシナ戦争が終結し、フランスが撤退すると、ベトナム民主共和国（当時の北ベトナム）下で、仏文教育は廃止され、クオックグー教育が推進された。

一方、西北地方には1955年に民族自治区（1955-1975）



「啓定二年二月閏拾八日、セン・バーン・バイン・クアイの書を記す」と黒タイ語でタイトルが書かれた家霊簿の最初のページ。8葉16頁のうち10頁に毛筆で記述。筆写者不明だが、1919年（啓定2年）の儀礼執行のための文書なので、その頃の手写本と思われる。
ベトナム、カム・チョン氏所蔵の原本を2001年に撮影。

が設置され、特殊な展開があった。自治区内では、各公的機関での自民族の言語と文字の使用が認められ、民族語による教育も目指されたからである。こうして、固有文字を持たない民族語に関しては文字の創造が、タイのように固有文字を持つ場合は、字体の統一や改訂が試みられた。タイ文字は、黒タイ文字の字体に基づいて制定された。そしてタイ文字教育は、自治区内各地で、クオックグー教育に一元化される1969年まで、実施された。

しかし、黒タイ文字を読み書きできるA村の12人のうち10人が、学校で黒タイ文字を習ったのではない。彼らが通った小学校では、黒タイ文字を教えていなかったからである。彼らが読み書きを覚えたのは、すでに耳で親しんでいる歌謡の歌詞を覚え、歌うためであった。電気もラジオもない時代、村人たち共通の最大の娯楽は、歌や踊りであった。1960年代までは、娯楽のために文字を習得しようという人が村にもいたわけであり、必ずしも学校教育の成果ではなかったのである。その後さまざまな情報機器の普及とともに、伝統的な歌や踊りに関心を示す若い世代は、どんどん減っている。

5. 黒タイ文書の生産と使用

A村で目にすることが出来る文書は、歌謡と暦書くらいである。ソンラー省の文書館に、1500をこえる黒タイの古文書が収集され、保管されているが、そのほとんどが、歌謡、暦書、物語である。残りは、若干の年代記、祈禱書である。文書館にない他のジャンルの古文書には、系譜文書(家霊簿)、慣習法などがある。

既述のとおり、葬式の執行と年代記『クアム・トー・ムオン』の関わりは明白である。他に、『タイ・プー・サク』という希少年代記がある。これは、1930年代まで、首領一族を祭る「くにの祭礼」を執行する際に読まれ、歌われた。また、上記『クアム・ファイン・ムオン』も、役職者たちの公的な宴席で歌うための年代記であった。

筆者が「家霊簿」と名付けている系譜文書も、首領一族を中心に継承されてきたものである。19世紀以前のものは実見していなし、非常にまれである。系譜文書と言っても、ほとんど故人の姓名の列挙にすぎない。系譜関係、婚姻、兄弟姉妹関係、生前の役職など、故人の個人情報も記述されていない。その意味で、東アジアに広く分布する家譜や族譜と異なるし、非常に不完全である。

とはいえ、家霊簿も、年に一度の父系祖先祭祀の際に、祖先を招くのに用いられる。祖先祭祀、系譜文書、姓は、東アジアの父系親族結合における3つの重要な道具立てである。つまり、曲がりなりにも黒タイ社会は、この3点セットを兼備しているのである。ベトナムや中国の王朝との間

に、20世紀に至るまで直接的な政治的支配-被支配関係や経済関係を築いてきた黒タイの首領一族は、宗族的な父系集団の編成を試みたためだろう。

慣習法は、筆者が知るところ、2冊しか現存していない。首領の系譜、支配領域、行政機構、各種刑罰、各種共同体儀礼などを記している。これが編纂されたのは、植民地下で西北地方の行政制度、インフラストラクチャーの整備が進む1920年前後であり、フランス植民地政府の指示に基づくようだ。つまり、これは黒タイ社会内部で用られ、流通した文書ではない。外部向けに書かれている点で、他の文書とは異質である。だから慣習法を例外とすれば、黒タイ文書は、娯楽のためのものと、儀礼執行と関わりを持つものに、ほぼ分類できそうである。

しかも、年代記、祈禱文書、系譜文書などの文書群は、共同体レベルの祭祀を執行する役職者としての司祭者集団が中心となって、生産、保管してきたことが明らかになっている。これに対して、暦書、歌謡、物語などを生産してきたのは、役職者とは限らない。とはいえ、歌謡などの文書も、筆者のこれまでの調査では、祈祷師や、1950年以前の村長の家族など、村でも宗教的、政治的に威信のある人々の周辺に集中していた。

要約するに、黒タイ文書は、ある特定の職業集団の人々が、特定の目的のために、生産、使用、継承してきたという性格が強かった。ベトナム語、クオックグーが普及する以前、黒タイ文字が彼らの間であまねく用いられていた訳ではなかったのである。

6. 文字継承の現在

以上、黒タイの文字文化の概要を述べてきた。現在の村で、その文字を読み書きできる人は少ない。しかも、実はベトナムの国家文字が普及する以前も、そうであった。共同体儀礼を担当する人や祈祷師を中心に、読み書き、文書は継承されてきたのである。この二つの時代で異なるのは、識字者の世代構成であろう。現在、読み書きできる人は、60歳代以上に明白に偏っている。

実際には、社会の中のある特定の人々が、特定の目的のために、文書を生産、使用、継承してきたという点は、他の多くのローカル文字にも共通している。というよりも、社会の全成員が、通信、記憶、計算、契約、商業、政治、法、娯楽、試験その他、あらゆる目的のために、日常的に用いることが目標とされる、国家文字のあり方の方が、むしろ近代以降に展開した特殊な現象といえるかもしれない。

1990年頃から、村の高齢者で黒タイ文字の読み書きを知る人が、年代記、歌謡、家霊簿などを書き残す動きもあらわれている。衣装とともに、彼らの文字もまた、タイ文

化を代表する視覚イメージであることが、マスメディア等を通じて普及してきたからだ。先述の通り、この流れを受けて、タイ文字に関する非常に初歩的な読み書きを、一部の小学校では教えている。しかし、若い世代の固有文字への関心は低い。生活のために、若い人がどんどん村を離れて出稼ぎに行かなくてはならない現在、彼らが求めているのは、高収入を得るための知識や学歴である。しかも、それにはベトナム語、クオックグーからアクセスするほかない。

(国立民族学博物館准教授)

(注1) Veidlinger, Daniel M. 2006 *Spreading the Dhamma; Writing, Orality and Textual Transmission in Buddhist Northern Thailand*. Honolulu: University of Hawaii Press. 飯島明子 2009 「貝葉写本のテキスト学—『タム文字写本文化圏』を中心とする若干の考察」齋藤晃編『テキストと人文学: 知の土台を解剖する』人文書院、209-228 ページ。Kashinaga Masao (ed.) 2009 *Written Cultures in Mainland Southeast Asia*. Osaka: National Museum of Ethnology.